研修会 2018

房総半島の大地の成り立ちと「チバニアン」

米澤理雄（船橋市）

日　時：2018 年 5 月 30 日（水）10：00～15：26　天気：曇り
場　所：市原市田淵　養老川河畔と田淵会館（市原市）
講　師：高橋直樹氏（千葉県立中央博物館 地学研究科主任上席研究員）
参加者：指導員 26 名、田淵のボランティア 2 名（石井氏・山田氏）
担当指導員：前田悦子　米澤理雄

9 時 9 分、五井駅の小湊鉄道で出発、10 時 4 分、月崎駅に着く。雨模様の天気で先を急ぎ、10 時 40 分に目的の田淵会館へ。川に入る身支度を整え、高橋講師の説明を聞きながら、いざ現地の養老川河畔へ。現在家や畑がある場所は、約 1 万年前は川底だった所。河岸段丘で段差ができ、今の川底まで急な坂がつづく。川底に入ると、昔海底だった証拠として、生痕化石がある。磁気を調査したスパイク（赤、黄、緑）の意味や地層の傾き、養老川の地層の特徴などの説明を受ける。他の見学に来ていた人達も参加し、3 班に分かれて聞くが、地磁気の不思議な現象に納得いかない様子である。会館への戻りは川の支流に沿って上がって来た。（ボランティアで草刈りの道）

田淵会館に戻り、昼食も短く切り上げ、13 時から高橋先生の資料を基に本格的な研修会。
①「チバニアン」とは何か？・地質時代区分、・新生代−第 4 紀−更新世−中期、②地磁気の逆転と「チバニアン」、・松山元範博士と玄武洞、・液体金属鉄からなる外核、・岩石や地層の古地磁気、③房総半島の大地の成り立ちと「チバニアン」、・房総半島のプレート、・プレート沈み込み帯周辺の構造、・房総半島の地質構造、・養老川流域の地質、等々。上級の 3 つの会議を通って、「チバニアン」として、ゴールデンスパイクが打たれたら良いと思うという事で締めくくりをされました。

「チバニアン」研修に参加された方の感想を聞きました。
1）昨年来養老川田淵の地層が約 77 万年まえの「地磁気逆転」の跡が観察できるとして、ニュースに度々取り上げられましたが、映像を見ても悲しいかな知識がないため何故そこが貴重なのか分かりませんでした。今回、高橋講師から、現地でお話を伺い多少は理解できた気がしました。決め手になったのは、77 万年前に噴火した木曽御嶽山の火山灰と聞いてビックリ。千葉の地層から御嶽山以外にも九州からの火山灰も観測されるとか、地球の活動の歴史を千葉の地層は記録していたのです。講師と一緒に現地に行ったのでこういうことも知りました。個人で行ったら「これな～に」で終わっていたと思います。とてもタイムリーな企画でした。（小川洋子）
2）約 1 年前に知人と訪れた時には、説明解説員的な方はいなく、ただ資料等を基に「あ～だ、こ～だ」と言いながら遠くから眺めた程度でした。また、その時は「主要観察ポイント」に行く坂道は、人の踏み荒らした跡で滑るような感じのアプローチ道しかなく、危険なためか「立ち入り禁止」になっており、ただ現地を見たという程度でした。しかし、今回は研修会とあり、県中央博物館の講師の室内講義と、ある程度整備された階段にて「主要観察ポイント」に行き、直接講師から説明等を頂き「チバニアン」の重要さが多少なりとも理解できた研修会でした。（龍門海行）